

ナート造成等の産業基盤充実に重点的に向けられました。しかし、広く薄く福祉を行ったことは、国民内部の亀裂を防ぐ統合装置としては巧みだったと思います。現在、中国では貧富の格差が広がっていることと伝えられますが、中国の為政者にとっては、日本の経験は参考になるでしょう。

その反面で、内向きの経済ナショナリズムを生み、日本の国際化の足を引っ張ったのも事実です。「国民国家」批判の視点を入れると、プラス面だけでは語れません。企業が生活の隅々まで介入する「企業社会」も形成された。ジェンダー的な視点からは、企業戦士の夫と専業主婦といった家庭内役割の固定化といった歪みも指摘できます。

—— 高度成長は社会を激変させ、金とモノがすべての社会になったという批判は庶民レベルでも根強くありますね。自然が破壊され、農村の豊かな風景が消失したと嘆く人も多い。

浅井 最近では、「バブルが悪かった」という批判の方が主流ではないですか？

高度成長期は、「古きよき時代」になりつつあります。活気があった時代が懐かしまれるわけです。

自然破壊や公害問題の重要さは私も認識しているつもりですし、公害は防止可能な社会現象だと思えます。

その一方で、好むと好まざるにかかわらず、止められない変化もあります。貨幣経済の進展や、グローバル化などです。「清貧の思想」(中野孝次)は、ある人にとっては一服の清涼剤でしょうが、他の人には退屈な説教に過ぎない。確実に言えることは、高度成長以前の社会には戻れないということです。

貨幣は社会関係の表現であり、貨幣経済の進展は人間関係を変容させます。モノも同じです。近現代史研究は、生産や労働に重点を置きすぎてきたため、消費の分析はほとんど空白です。いつ日本は大衆消費社会になったのか、ポードリヤールの「記号としての消費」はいつ生まれ、社会をどう変えたかなど、本格的な研究を待ちたいと思います。

ルポ

「ラペ」と呼ばれた日本人

ある残留兵の戦後

近藤雄生



ラペの妻
ギアンと
孫娘ポーパ

◆ 国境そばの小さな町で

祖父について自分はほとんど何も知らない、と彼女はいった。五年間も一緒に暮らしていたのに、本名すら知らないというのだ。怖かったという印象ばかりが残っている。だから必要以上のことをなかなか話せなかった。しかし、祖父もまた自分のことを語ろうとはしなかった。

「祖父は「ラペ」と呼ばれていました。だから祖父の名前といえば、私は「ラ

ペ」としか知りません。それでも、このことだけはたしかなはず。祖父は日本人だったんです」

黒い髪に黒い瞳。そして山岳民族らしい褐色の肌を持つ女性ポーパは、きれいな英語でそういった。

タイの最北西部、ビルマ(ミャンマー)との国境付近の山中にメーホーンソンという小さな町がある。

タイ北部の中心都市チェンマイからさらに北西に二〇〇キロ以上も山奥へと

土建国家が批判されるのは、所得再分配の重点が公共事業に置かれすぎたことと、公共事業の配分の仕方が不透明・不透明であった点です。完全雇用が実現した後には、所得再分配をめぐって、歪みが生じ、石橋の原点から離れていった。後に革新自治体では是正されていく面もあるのですが。

今日では高度成長期の政治手法、政策運営のスタイルは、もう通用しません。そこを見失うと、まずいと思います。最近読んだ本のなかで佐藤優さんの『国家の民と新社会』は格別におもしろい本で感服しましたが、ただ一点気になったのは、同書では小泉内閣以前の自民党政治のシステムを高く評価するわけですね。小泉内閣流の新自由主義改革に対する批判として、旧来の談合型政治スタイルを逆に評価してしまうという罫に陥っていないだろうか。

不可逆的なグローバリゼーションのなかで、高度成長期を再検討するという課題に今後も挑戦していきたいと思えます。

走った先にあるこの町は、外部の人間にとってはは、近くにいわゆる「首長族」の村落があることで知られるぐらいではない。平凡なタイの田舎町であるが、ビルマとの国境が近いということがこの町を特徴づけていることは間違いない。

ビルマからの難民である「首長族」がこの付近に暮らすのも、難民と関わる仕事をやる人間が多いのも、この町が常に隣国との関係の中で生きてきたことを如実に示している。タイ・ビルマの複雑な政治事情や民族分布を反映したそんなメーホーンソンで、私はある興味深い話を耳にした。

「この近くに元日本兵の家族がいるらしいんだ」

そう教えてくれたのは、ビルマ人とイタリヤ人の血を受け継ぐオーストラリア人という、この町の住人だった。予想もしていなかった話に驚き、私はそれだけの情報をたよりにその家族のことを探して回った。タイ語が話せないため、英語が通じる人を手当たり次第に訪ねていく

しかなかったが、しかしその方法で意外にも簡単に核心に辿り着けた。難民問題に関わりのあるNGOの職員が、その日本兵の孫を知っているというのだ。そしてその一時間後に会ったのがポーパという二〇歳の女性だった。

「祖父ラペは日本人でした。詳しいことは知りませんが、戦争の後、ビルマからタイへやってきたと聞いています」
ポーパはカレニ族の父とシャン族の母を持ち、その母方の祖父が元日本兵なのだという。

私は、こんな山奥の小さな町に住む山岳民族の女性に日本人の血が流れているということがわかには信じられなかった。そしてだからこそ、ポーパから話を聞いた後、さらに「ラペ」と呼ばれる男の息子や妻にも会いたいと思った。この山奥で一人の日本兵が、何をし、何を考えながら半世紀以上という時を過ごしてきたのか、そしてラペとは誰だったのかを私は聞きたかったのだ。

しかし、ラペについて、特に彼の過去悲劇的な状況に直面した。

補給も何もなく、ただただ全滅へ向けて疾走しているだけのような惨状を座視するに耐えず、前線の師団長たちはたびたび後退を懇願する。だが、ビルマ方面軍所属第一五軍司令官・牟田口廉也はこれを一蹴、抗戦継続を強要した。

その強硬姿勢は、ついには師団長たちに軍人生命を賭けた決断に踏み切らせ、第三一師団長・佐藤幸徳が独断で退却を決定するに至り、その後三師団長みなが罷免されるという異常な事態へと発展する。そして七月には全面撤退となる。が、撤退する日本兵の有様は悲惨を極めた。自身もその撤退行を経験した和田一義はこう振り返る。

「……次ぎから次ぎへと、栄養失調と、マラリヤ、アメーバー赤痢などで餓死寸前、しかも破れ軍衣を纏い、瘦衰いまるで乞食の姿其のもので、勇姿日本軍將兵とはとても思えない、実に哀れな姿で骨と皮ばかりの、まるで、幽霊のようにならふらと歩き、倒れると、其の場で

について、家族が知っていることは驚くほど少なかった。孫が、息子が、そして妻が、彼の本名すら知らなかったのだ。

ラペは六年ほど前に死んだ。彼の遺品は何一つない、という。ただ当時、彼の持ち物から、タイ語で書かれた一枚のメモが見つかっている。

「一九四二年にマレーシアからシンガポールに入る。戦い続けた。一九四五年ビルマに来た」

しかし、これが誰によっていつ書かれたものかはわからない。ラペはタイ語の文字が書けなかったはずなのだ。

「残留日本兵」が唯一遺したものと見える家族を前に、私はビルマとタイの深緑の山地に埋もれていった彼の人生を、自分なりに辿ってみたいという気持ちが強くなり、敗戦から六〇年が経つ今も、

おそらくそれほど変化していないだろうこの山林の風景の中で生死をさまよった多くの日本兵の姿を、私は思い浮かべた。

死に至る、死体は見るみる、ガスが充満して皮が破れんばかりに、ふくれ上り、目、鼻、耳、口からウジ虫が入り込んで、見るみるうちに、死体が見えなくなる……〔注〕

撤退の道には無数の白骨が転がり、そこは「白骨街道」と呼ばれるようになった。インパール作戦では参加兵力一〇万のうち半分以上が戦死、餓死、病死し、ビルマ全土では、三〇万以上の日本兵のうち一九万人が犠牲になったといわれる。そして生き残った兵たちは、その後ビルマやタイでそれぞれ敗戦を知ることになる。その中の一部が、敗戦後の収容所生活から抜け出すなどして、そのまま現地に残ることを決めたのだった。

私はメーホーンソンを出た後、これもまたビルマとの国境付近の町メーソット近郊で、今もタイで暮らす二人の元日本兵に会った。一人は中野弥一郎、一人は坂井勇。二人ともすでに八〇歳をだいぶ越えた老人で、本当に彼らが残留という道を選んだ男たちなのかと思っ

◆なぜ帰らなかったのか

日本軍が「インパール作戦」を開始したのは、すでに戦況が厳しくなっていた一九四四年三月のことである。インパール作戦とは、朝日新聞の従軍記者であった丸山静雄によれば、

「ビルマに進出した日本軍が幾多の作戦によってほぼ全ビルマを占領したあと、さらにビルマ国境を越えてインドに進攻しようとした一大作戦をいう。この作戦はビルマを確保するためにはビルマの防衛線を国境外に推進しなければならぬとする戦略と、インドに兵を入れ、インドを独立させて英国を浮き上らせ、英米の連合戦線を分断することによって太平洋戦争を終結に導いてゆきたいとする政略とが結びついて企図されたものであった」〔インパール作戦従軍記〕岩波新書

この作戦は何よりもその無謀さと悲惨さによって知られる。食糧・弾薬の不足、英印軍との物資や攻撃力の差により日本兵は、戦傷、疾病、飢餓によってまさに

かな表情が印象に残った。彼らはそれぞれインパール作戦に参加しビルマで敗戦を迎えたが、捕虜収容所に入れられた後にそこを抜け出すことを決意する。

そして二人は別々にだが、ともにカレニ族の小さな村に隠れて暮らし始めた。村人たちは彼らをかまってくれたが、日本人であることが外部に漏れると、イギリス軍かビルマ軍に捕まってしまう恐れがあった。そのため、日本人同士でもビルマ語で会話する日々だった。そのようにしながら数年暮らした後、彼らは国境を越えてタイへ逃げ、そこで人生をすべて振り出しに戻して生き始めたのだ。

敗戦後、なぜ収容所を離れ、残ることを決めたのか。その問いに対して中野は、戦中から、日本が負けたら帰らないと決めていたのだといった。坂井は、帰りたいとは思っていたのだが、日本に向かう

こんなう・ゆうき 一九七六年生まれ。ルポライター。東京大学大学院工学系研究科修了。二〇〇三年よりアジアを中心に旅をしながら、各地よりルポを書く。現在は中国・昆明に在住。

引き揚げ船はイギリス軍に爆撃されるらしいという噂に絶望し、帰国をあきらめたのだといった。言葉にしてしまえば簡単だが、しかしその背後には、もちろん計り知れない葛藤と決意があった。

中野は、もう二度と見ることはないだろう家族の顔を思い浮かべながら、また日系ブラジル人である坂井は、日本とブラジルという二つの故郷に少なからぬ未練を残しながら、それぞれ収容所を後にした。そして、山中の小さな村で隠れて暮らすうちに、いつしか妻ができ、家族ができていった……。

ラペがなぜ日本に帰らなかったのかについて、彼の息子の一人であるトンはどのように語っている。

「日本兵は負けたら自殺しなければならなかった。でもその勇気がなくて死ぬ、それを恥じて隠れていた兵士たちがいたと聞きます。父はそんな日本兵の一人だったようなんです」

そして、だから父は自分の過去を話したがるなかったのだろうか、と言った。

通訳を通しての私の質問に、彼女は一つ一つゆっくりと語りだした……。

——ギイアンの前にラペがひょっこりと姿を現わしたのは、もう五〇年以上も前のことになる。数人の他の日本人とともにボートに乗ってやってくると、彼は初対面であるにもかかわらずギイアンに結婚を迫った。「結婚しなければ、殺すぞ」というラペの顔は真剣だった。だから彼女は、ラペとの結婚を承諾せざるをえなかった。だがそのとき、ラペが元日本兵だとは思ってもよらない。てっきり船乗りだと思っていたのだ。

当時、日本兵は「悪い人々」だと考えられていて、彼女も日本兵に対する恐怖心を人並みに持っていた。だから自分の夫が日本兵だったと知ったときは、たしかに驚きはあった。しかし、すでに結婚しているのだから仕方がないという気持ちで湧き出てくるのも早かった。ラペが戦時中どこで何をしていたのかは、ギイアンはほとんど知ることはなかった。村人は彼のことを「ラペ」と呼んだ。

また、ラペの妻によれば、彼は以前こんな話をしたことがある。

まだビルマにいた頃のこと。ラペは四人の日本兵とともに、ある洞窟の奥へと入っていった。洞窟の中にいくつものきれいな石や仏像があるというのだ。しかしラペを除く四人はなんらかの理由でその中で窒息死してしまう。そして、一人取り残されたラペを助けてくれたのが、カレニ族のリーダー、セミュレだった。すでに死を覚悟していたときの出来事であり、だからここでカレニ族とともに生きることを決めたというのだ。そのとき、きつとラペの中には、生きて日本に帰ることなどできないのだという思いがあったに違いない。

しかし皮肉なことにその頃日本では、彼らに死を強いた張本人である東條英機自身が、自ら命を絶つことができずに「生きて虜囚」となった。そしてラペたちが、まさにそのために命を賭してきた天皇は、敗戦後もほとんど自身の真の「肉声」——一人の人間としての心の声を

本人は自分の名は「ウナミ」だと言っていたのだが、周囲が「ラペ」と呼び続けたために、いつしかあきらめ、彼自身もそう名乗るようになる。その言葉にどのような意味があったのかはわからないが、村人たちがラペに好意的だったことは間違いない。もともと、カレニ族、カレン族、シャン族などいくつもの民族が混じり合っていたその村に日本人が加わると、新たな民族が増えたといってみな歓迎してくれたのだった。

おそらく彼にも、中野や坂井と同様に、外部に日本人であることを漏らしてはならない、という緊張感があったはずだが、村人たちはみなこの日本人をかくまってくれた。慣習も言葉も民族もまったく異なる土地であったが、彼の戦後はそのように穏やかに始まったようである。

だが、そんなラペの前に待っていたのは、平和な日々ばかりではなかった。カレニ族の民族自決闘争という、ラペにとってはまったく新たな未知の戦いが、気づくと目の前で始まっていたのだ。

発することなく、「神」から「人間」となり、新たな「人生」を歩き始めていた。おそらくラペはそんなことを知る余地もなかった。そして戦後の人生を、日本人の誰もいない新たな土地でひっそりと送らなければならぬと覚悟したのだ。

◆「私は日本人ではない」

「夫には私以外に三人の妻がいました。日本に一人、そしてビルマにもう二人。日本の奥さんとの間には子どももいたよ。うです。私が彼に会ったのは、戦争が終わってから四年ほどしてからのことだったと思います」

ポーパの祖母、すなわちラペの妻は、メーホーンソンからバイクで一五分も行ったところにあるシャン族の村で今も元気に暮らしていた。名をギイアンと聞いた。ポーパを通じて、ラペの話聞かせてほしいと頼むと、彼女は私が誰かを尋ねることもなく、ただ、うんうんと穏やかに頷き、ガランとした簡素な家の中に迎え入れてくれた。そしてポーパの

第二次大戦が終わった後の一九四八年にビルマは独立を果たすが、その直後からビルマ国内では、カレン族、モン族などいくつかの民族が、独立したばかりのビルマ政府軍相手に戦い始め、カレニ族も同様に自立を目指したのだ。

ラペは、それが自分とは関わりの薄い戦いではありながらも、カレニ族の兵として再び銃を持つことを決める。ラペのこの戦いでの日々のこともまた、ギイアンはほとんど知らない。ただ確実なのは、彼は肺に病を抱えていたため、兵として戦うことは三、四年でやめざるをえず、その後は食糧の監視役として働きながら、農夫をしていたということだけだった。

ラペが兵士として戦うことを志したのは、カレニ族のリーダーに命を助けられたことが一つの契機となったに違いない。また、周囲の人間との連帯意識があったことも想像に難くない。だが、そう思いながらも私は、再び銃を持ったラペの心の底にはそれだけでない何かがあったような気がしてならなかった。

第二次大戦中、祖国のためと信じて戦った結果、彼は死を迫られたはずだった。そして死ぬことができないという「恥」を自ら背負い込み、結局祖国に帰ることができなくなっていた。彼は武力で戦うという行為に裏切られたのではなかったのか。にもかかわらず、再びその世界に戻っていったことが私には引っかけたのだ。戦うことをやめ、山奥でひっそりと暮らすことこそ、彼の求めた戦後だったのではなかったのか……。

取材を終え、そんなことを考えていたときのことだった、三〇年ほど前に撮られたある貴重な映像を目にすることができたのは、そこに現れたのは、たしかに彼の姿だったのだ。

その映像とは、映画監督の今村昌平が一九七〇年代に、東南アジアの残留日本兵たちを追って撮ったドキュメンタリーである。まだ戦後三〇年ほどでしかなかった当時、ある者はマレーシアでイスラム教徒となり、またある者はタイで細々と商売をして暮らしていた。そして

そのそれぞれが映像の中で、各々の方法で自らの戦中と戦後を語った。その映像には私がタイで会うことができた二人の元日本兵、中野と坂井も登場した。しかし私が驚かされたのは彼ら二人の姿ではない。

それは、「続・未帰還兵を追って」という作品の、まさに最後に出てきた一人の男の姿だった。ほうほうを訪ね回った今村が、ビルマの山中にまだ元日本兵がいるようだという情報を頼りに山中深く入っていく。情報は、ビルマ政府軍と戦うカレニ族の兵士からのものだった。

川を渡り、山を分け入って今村はそのキャンプ地にたどり着く。そこに現れた男の姿に私は目を疑った。「ミスター・ウラペ？」という今村の呼びかけに答えて、「ナンデスカ、ナンデスカ？」という日本語と思われる言葉を発しながら、背中に銃を抱えて出てきたその男は、まさに私が何枚かの写真で見っていたウラペそのものだったのだ。

真っ黒な肌と短く刈り込んだ頭、周囲

士としてもう一度武器を持つことを選んだのかもしれない。今度こそ納得いく形で兵士としての人生を完結させなければ、と思いつながら……。

◆父として、夫として

ウラペが亡くなる何年か前に、彼の家族かもしれないという日本人たちが、ウラペに会いに日本からやってきたことがあった。彼らは人づてにウラペの存在を知り、それが、戦後帰らぬままだった自分たちの父親なのでは、兄なのではないかと思つたのだ。

その日本人の一人の連絡先をウラペの息子トンが持っていた。それは何かあれば連絡してくれと言って渡された、名前と連絡先の書かれた一枚のカードだった。

長崎県という住所とともに記された番号に、私は電話をかけた。だが、受話器の向こうの女性に用件を伝えると、彼女は少々困ったといった声で、こういった。「もう亡くなったのです」

ウラペを自分の兄だと思つてタイへ行つ

のジャングルとほとんど同色の緑のシャツ。そしてロンジーを腰に巻き、日本人かどうかなど外見からはまったく判断できないその男が、今村を少し警戒するような面持ちでその突撃取材に答えていたのだ。

「日本人ですか」
今村のその問いに対して、「ウラペ」と呼ばれるその男は、たどたどしい日本語でまずこう答えた。

「そうです。私は、ニホン……」
だが、その後しばらく悩むようになってしまう。彼はこう言い直した。

「そうじゃないです、ビルマです。そうです」

そしてその一方、「ウラペ」は自分が過去に日本軍で戦っていたことを話し出す。「私は日本の兵隊さんです」と。自動車隊です、分隊長はアラキだった、インパール……。自分の日本名はヨシノブという、私は帰らない……などと。

「ウラペ」の日本語はたしかにたどたどしかった。数十年使われないと母国語とたその男性は、三年前にすでにこの世を去っていたのだ。

しかし、がっくりしている私に、ここにかけてみてくださいと、そのとき一緒にタイを訪ねたという女性の名前と電話番号を覚えてくれた。それは、ウラペが父親ではないかと考えた女性だということだ。その女性は、ウラペに会い、彼が父親であることを確信する。自分がまだ幼かったときに戦争に行ったまま、帰ってこなかったあの父親に間違いはない、そう思った。彼女は必死にウラペに語りかけた。あなたはお父さんではないのですか、私を覚えてないのですか、と。

しかしウラペは、その日本人たちに、妻の民族のシャン語でただこういったのだ。「私は耳が悪くて、あなたたちのいつていることがわかりません」

それでも「家族」はあきらめず、最後には科学に証明してもらおうと決意する。ウラペの唾液を取り、アメリカでDNA鑑定を依頼したのだ。

しかしその結果は、「家族」にとって

日本人なのかと今村に尋ねられたとき、彼は明らかに戸惑っているように見えた。私にはそのラペの姿が、戦後四半世紀以上が経っていた当時にまだ、自ら死を選ぶことができなかった「恥」を抱え続けていた一人の日本兵の姿として映った。

もしかしたら、そのときまだ、彼にとって日本兵としての人生は終わっておらず、だから彼は、目の前に再び戦うという選択肢が提示されたとき、一人の兵

意外なものだった。否だった。ラペは父親ではなかったのだ。

「その後はもう連絡はとっていません」ラペとは誰だったのか、ここで最後の糸すらも切れてしまったことになる。

だがラペは、その日本人たちに会ったとき自分が日本人だとは一切言わなかったものの、「やはり日本に帰りたいという気持ちも残っている」と、ギアンにはいった。結局彼らは家族ではなかったが、自分を求める日本人たちに会ったとき、ラペの気持ちの振り子は確かに母国日本へ向けて揺れていたのではないか。

だがそのもう一方の端には、ラペが半世紀をかけてつくり上げたタイでの生活と家族があった。けっして裕福ではないが、しかしそこにはたしかに、もう失われることのない穏やかで幸せな日々があったのだ。

ラペは農業や庭仕事が好きだった。きれいで庭の手入れは欠かさず、そこで育てたナス、キュウリやマンゴーを隣人たちに配って歩くこともあった。ギ

アンが今、夫を思い出すときに浮かんでくるのも、庭にいる彼の姿であり、彼も庭の話をするのだけは好きだった。しかし一方でラペは、ひどく気性が荒かった。ギアンは彼にナイフを投げつけられたこともあるという。

そんなラペとの結婚生活は、ギアンにとって必ずしも幸せといえたかはわからない。しかしそれでも、彼女は偶然から人生をもにすることになった彼を愛していた。いや、愛することに決めただけなのかもしれないが、五人の子どもを授かり、ラペが死ぬまで一緒に過ごしてきたことはたしかだった。

ポーパが思い出せる祖父の姿は、そのような当たり前の一人の人間としての姿でしかない。祖父の過去について、それまで断片的には聞いたことはあったものの、ギアンの言葉を通訳しながら、ポーパ自身が、驚き、笑い、聴き入っていることが何度もあった。

そんなポーパの様子を見ながら、ラペは日本兵である前に、一人の祖父であり、

父であり、夫であったのだという当たり前のことを私は感じていた。

ポーパには、祖父ラペに関するこんな思い出が残っている。彼女が釣りに行くというとき、いつもラペはこういって笑ったものだった。

「もしお前が魚を釣ることができたら、そいつをおれはナマで食ってやるよ」

ポーパからその話を聞いたとき、私は彼女に訊いてみた。日本ではナマで魚を食べる習慣があることを知っているか。彼女は、知らない、といい、ああそうだったのか、と楽しそうに笑った。

一人の日本兵がこのタイの山奥に遺していったものは、敗戦から六〇年経った今も、間違いなく生き続けている。そのたしかな証であるポーパたちを前に、私は思った。それはけっして、ここだけの話ではないはずなのだ、と。

【文中敬称略】

注：タイ北部、クンユアムの旧日本軍博物館の資料冊子掲載の『私の戦後五〇年』より抜粋。

http://www.iwanami.co.jp/kenpou/ 岩波書店

をてへ 法え争 憲変戦 行こう

という世の中にしない
ための18人の発言

井筒和幸、井上ひさし、香山リカ、姜尚中、木村裕一、
黒柳徹子、猿谷要、品川正治、辛酸なめ子、田島征三、中村哲、
半藤一利、ピーコ、松本侑子、美輪明宏、森永卓郎、
吉永小百合、渡辺えり子 岩波ブックレット No.657

（表紙）副田高行

緊急
出版

戦後最大の分岐点！ 決めるのはあなたです。

9条の理念、底力、可能性とは？ 多彩なメンバーが各々の体験から、熱い思いを語る。関連コラムも掲載。【岩波ブックレット657】定価500円（税込）